

1. 教育の責任

地域みらい学科での専門科目、必須の科目である科目で3コースにまたがる学生の養成においてコース共通の基本科目の担当である。情報処理能力獲得のために必要な教育を行うことであり、情報ツールの活用が不可欠な時代状況の中で、学生にとって必要不可欠な能力を身につけ送り出すことが責務であると考えている。

2. 教育の実施における理念

情報科目については常勤・非常勤を含め複数の教員で各コースで実施されているため、目標や習得する内容をある一定以上のレベルに揃える工夫が必要と考える。

学生のレベルは、入学前までの習得状況によって大きく左右されるため、能力や技能の設定において難しい所がある。留学生の場合は、日本語の入力などにおいても困難な場合があり大きな差が開いている。

3. 教育の方法

情報教育の基本である情報リテラシーⅠ・Ⅱにおいて、1年生の科目であり、さらに必須である。情報リテラシーⅠでは入学前までの能力の差を埋めながらも、一定の水準に達するようにするためにタイピングや基本の編集技術などを教育しながら、さらに様々な活用能力を身につけることを目標としている。

また、レポートなどの提出においても必須の技術である。スマホは得意でもPCのタイピング技術が低いケースもあり今後も課題の1つであると言える。

スキルの重視・・・コンピュータの基本操作においては、スキルがないと処理することに困難が伴うため、スピードは求めないものの学生自身で処理ができるスキルを身につけるための工夫をしている。基本操作の説明後、課題・演習などを個人で作成するなどである。

思考する仕組み・・・スキルがあっても異なる問題において応用・展開する思考も必要である。ワード、エクセル、パワーポイントなどにおいても同様に練習問題で手順を身につけた後、活用する方法を身につけるように工夫している。授業があらかじめ用意された見本をまねて打つだけのものもあり、素早く入力を終える学生もいるが、思考する仕組みも組み入れる必要性がより高まった。

将来的な活用の意識・・・授業の中だけで終わらず、現実的な課題や就職後での活用など必要なツールとして使えるような練習・課題作成を行っている。

4. 教育の成果

学習成果はある一程度達成できていると考えられる。授業評価は、韓国語文化、グローバル共生IT、司書アーカイブズの3つのコースの結果である。情報系の全科目についての一元的評価は行われていないが、情報リテラシー科目(Ⅰ)においては次のような評価であった。在籍者の人数によって、合同で行われるためコース別にはなっていない。

韓国語文化コース

1	2	3	4	5
		2	7	11

グローバル共生IT/司書アーカイブズ(合同クラスのため)

1	2	3	4	5
			2	6

あくまでも満足度レベルでの結果であるので、ルーブリックなどの評価観点との関係で評価する必要があるが現

時点では、共通のそのような評価観点は検討されていないため実施していない。これらの評価は、身についたかどうかの評価ではなく授業を受けて満足したかどうかではあるが学習にとっての大きな要素でもあるので一つの指標として用いることとした。

5. 教育の目標

この授業での評価を通じワードやエクセル、パワーポイントの基本アプリの技術を身につけ、様々な課題を処理する力を身につけるためには、この練習だけでは達成できない。これを活用して実地的な課題解決や他の科目への効果的な利用を意識した練習のためには、個々人のレベルの差などを考えると難しいと同時に、レベルの高い学生にとっては有意義にも思われる。この授業は、練習がまず何より大切であるが、操作だけの練習だけではなく様々な科目での活用によって身につけているものだと考えている。

特に「情報リテラシーⅠ・Ⅱ」は、コンピュータの操作やアプリケーションの操作が中心であり、高度化していく機能の習得にも多くの時間がかかる。実務的な問題に取り組むことや他の関連する科目を通じてスキルを高めていくこともあるのでよりそのことを意識した内容としたい。